

メ

メイスフィールド John Masfield 一八九八—一九六七 イギリスの詩人、小説家、劇作家、児童文学作家。一三歳で海軍に入り、船乗り生活、アメリカ放浪などの後、二三歳で詩が売れはじめた。大人向けの歴史小説、冒険小説も書いたが、帆船による紅茶運搬競争を描いた『ニワトリ号一番のり』(一九二七)のほか、『夜中出あるくものたち』(二七)、『喜びの箱』(三五)などの子ども向けファンタジーもある。一九三〇年には桂冠詩人に選任された。(酒井邦秀)

名著複刻日本児童文学館 めいぢうぶつこくにはほん
じじうぶんがくかん 明治・大正・昭和三代にわたる児童文学の名著を復刻刊行したものの。全三三冊、付録一。ほるぷ出版、一九七〇年(昭45)一二月初版刊。編集委員瀬沼茂樹、鳥越信、滑川道夫、福田清人、藤田圭雄。児童図書はとかく消耗品扱いされ、一般家庭はもちろん図書館にも保存されることが少ないが、本復刻は明治期の尾崎紅葉『鬼桃太郎』

から昭和戦中期の壺井栄『夕顔の言葉』までを精選し、文学史的に体系づけ、原典に忠実に再現している。中に幸田露伴『宝の蔵』、押川春浪『海底軍艦』、小川未明『赤い船』、野口雨情『十五夜お月さん』など稀覯本に近い図書も入っており、研究者、愛好家に好評をもって迎え入れられた。同じ編者・出版社からその第二集三三冊が七四年九月に出る。こちらには島崎藤村の『眼鏡』をはじめとする『愛子叢書』五冊、小川未明『金の輪』、新美南吉『花のき村と盗人たち』などが収められている。

メイン ウィリアム William Mayne 一九二八—イギリスの児童文学作家。ヨークシャー生まれ。早くから作家を志し、二五歳の時に処女作を出版し、三冊目の『A Swarm in May 五月の蜜蜂』(一九五五)で、児童文学世界における地位を確立した。『草の綱』(五七)ではカーネギー賞を受賞し、以後、毎年二冊ぐらいずつ新作を発表している精力的な作家である。メインの作品に共通する特徴は、宝探しと地方色である。子どもたちの探す宝とは、金銀財宝ではなく、秘密の通路だとか、砂に埋もれた鉄道線路であるが、子どもたちは探す過程で、その土地の歴史や伝統に目覚め、自己を拡大していく。『砂』(六四)以後、メインのリアリズムは、不安や不満のある生活を描いて、一層深刻さを増した。子どもたちは、人間関係の難しい問題に、た

とえ無駄な努力であろうとも、取り組もうとする。また、メインは、『地に消える少年鼓手』(五六六)で、独自のファンタジーを展開した。(谷口由美子)

メグズ コーネリア Cornelia Meigs 一八八四—

一九七三 イリノイ生まれのアメリカの作家。永年の教員経験を基盤に、文学的な創作活動、ノンフィクション、研究著作活動など幅広く充実した仕事を遂げた。

『オルコット物語』(一九三三)ではみごとなオルコット像を描きニューベリー賞受賞。家庭小説、歴史ものとして『The Windy Hill 風の丘』(一一一)、『Call of the Mountain 山の呼び声』(四〇)がある。『A Critical History of Children's Literature 児童文学批評史』(五三)と『Jane Adams シェーン・アダムズ』(七〇)は名高い。(鳥 式子)

メーンソン ルーサ・ホワイティング Luther Whit-

ing Mason 一八二八—九六 近代日本の音楽教育指導者。アメリカのマサチューセッツ州において音楽教育実践指導ののち、ボストンで知り合った伊沢修二、目賀田種太郎の推薦で一八八〇年(明治一三)三月来日、一八二九年七月帰国した。この間、音楽取調掛として、『唱歌掛図初編』『小学唱歌集』『幼稚園唱歌集』の編纂に従事した。また音楽取調掛として伝習生への授業だけでなく、楽器の購入、東京師範、同附属小学校、学習院などへの出張教授、京阪神への旅行などを通して、広く

日本へ洋楽の導入・普及、および音楽教育の基礎をつくった。帰国後も、再来日を望んだが実現しなかった。(田浦桂三)

メーテルリンク モーリス Maurice Maeterlinck

一八六二—一九四九 ベルギーの詩人、劇作家、思想家。マールリンク、あるいはマールランクとも呼ばれる。ベルギーのガン市の弁護士の子に生まれたが、パリに出て象徴派の詩人たちと交わり処女詩集『温室』(一八八九)を出し詩人として出発、続いて象徴主義的戯曲『マレーヌ姫』(八九)、『闖入者』(九〇)、『群盲』(九〇)を発表、オクターブ・ミルボー(フランスの作家)によって『現代のシェークスピア』と賞賛される劇作家となった。戯曲『ペレアスとメリザンド』はドビュシー作曲の歌劇として成功し、劇作家としての地位を高めた。続いて発表された『内部』(九四)、『タンタジイルの死』(九四)、『モンナ・パンナ』(一九〇二)は、リアリズム演劇主流の近代劇に代わるものとして世界に広く迎えられ、我が国でも、これらの作品は初期新劇運動の重要なレパートリーとなった。とくに、一九〇八年、ロシアのモスクワ芸術座で初演された『青い鳥』は童話劇として好評を博し、一年にノーベル賞を受賞する有力な理由となったといわれる。『青い鳥』は、我が国でもいち早く紹介(二一、島田元麿、東草水共訳)され、二〇年(大正)畑中夢坡の民衆座により有楽座

で初演されて以来、最も人気のある童話劇として広く上演され、さまざまな形の出版物として流布している。思想家としても知られ、『貧者の宝』(一八九六)、『知恵と運命』(九八)、『蜜蜂の生活』(一九〇二)、『蟻の生活』(三〇)などがあり、すべて邦訳されている。第二次大戦中はファシズムに反対しアメリカに移住したが、晩年は南仏のニースに帰り死去。邦訳の『マーテルリンク全集』六卷(二〇一—二二)もある。(富田博之)

メルヘン ドイツ語の Märchen からきている。これはドイツ語特有のことばで、フランス語には conte des fées(妖精物語)と訳され、英語には fairy tale(フェアリー・テール)と訳されている。メルヘンの一般に認められた定義はまだない。さしあたり、「不思議なことが主人公に望ましいように起こる空想的叙事文学」ということができよう。メルヘンは、民衆の間に流布しているメルヘン(昔話)と、創作されたメルヘン(創作童話)に分かれる。前者は、文字をもたない人々の間に口から口へと伝えられてきたもので、グリム兄弟がはじめて文学に書きとめたようなものである。後者は、個々の作家が前者の語り口やモチーフを受け継ぎ、自分の考えに従ってつくり出したものである。グリム以後も「昔話」の収集は続けられているが、中でも評判が高いのは、ベヒシュタインの『Deutsches Märchenbuch ドイツ昔話集』である。「創作童話」が盛んになるのは、

ロマン派以後である。ロマン派にとつて、「メルヘンはいわば文学の規範」(ノヴァーリス)であった。ロマン派は、ノヴァーリスの『青い花』、シャミッソンの『影をなくした男』、E・T・A・ホフマンの『黄金の壺』など優れたメルヘンを生んだが、そのうちハウフのメルヘンが今も子どもの読み物として残っている。アンデルセンはデンマークの人であるが、ドイツでは自国の作家のように受け入れられている。アンデルセンのメルヘンにはめでたく終わらない話があるが、二〇世紀に入るとその傾向はますます強くなる。二〇世紀のメルヘンの特徴を最もよく表しているのは、カフカの『変身』であろう。メルヘンというのは元来めでたく終わる話を指すのだから、この種の話はむしろアンチ・メルヘンと呼ぶべきであろう。「メルヘン」と「ファンタジー」の境い目は曖昧である。ミヒヤエル・エンデの『モモ』は最も現代的なテーマを扱ったファンタジーであるが、エンデ自身はこれをメルヘン・ロマンと呼んでいる。

【参考文献】宮下啓三『メルヘン案内』(一九八二) 日本放送出版協会 (野村 滋)